

葉集を読む

松岡 隆子

今日一つ花の名覚ゆ秋うらら

鈴木 富代

今日一つ花の名を覚えたと言っているだけの句だが何故か心を惹かれる。風もない穏やかな秋日和の花野を、色とりどりの秋草を愛しみながら歩いて行く。よく見かけるが名前を知らない花がある。同行の一人がその名を教えてくれる。知らなかった花の名前が分かった。それだけで心ゆたかな気分になる。それは「秋うらら」だから。あらためて季語の力を思わせてくれる句だ。

曼珠沙華罪なき民の血の色に
朝刊に不穏の見出し露寒し

三宅まどか
高野 達子

ロシアのウクライナへの攻撃が続くなか、突如イスラエル軍がパレスチナ自治区ガザ地区を襲撃した。小学校や病院が空爆され、罪もない人々の命が奪われていく。目を覆いたくなる惨状に誰もが心を痛めている。

三宅さんは五十年代、戦争を知らない世代である。真っ赤に群れ咲く曼珠沙華は罪なき人々の血の色だと、心の痛みを生々しく表白する。

一方、九十年代の高野さんは七十八年前の戦争を体験している世代。新聞の不穏な見出しに当時のことがフラッシュバックする。同時作の「くり返す戦の歴史身に入めり」は戦争体験者の実感と思う。静かな声で反戦を訴えている。

誰もが戦争は決してあつてはならないと思っている。一日も早く平穏な世になるよう祈り続けたい。

皂角子の実や北東は鬼門なる

小泉 恵子

皂角子は皂莢とも書くが、初めて見たときは先ずその字が読めず、また皂角子もその実も知らなかった。あるとき近くは東京大学農学部演習林に皂角子があることを知ってからは何度か見に行った。20センチ以上もある振じれた莢豆がたくさんぶら下がっている様は独特な感じがある。また幹や枝には鋭い棘があり庭木としては向かない様だが、北東の鬼門に植えておけば魔除けの効果がありそうだ。

阿羅漢の五百の貌の秋思かな

梅澤 惇子

五百羅漢とは釈迦入滅後に教典編纂の第一結集、第四結集に五百名の仏弟子達が集まったことに由来するといふ。五百体の羅漢像の顔や姿態は一つ一つ違っていて眺めていて飽きない。笑顔や泣き顔、困った顔などそれぞれで、一つとし

て同じ顔はない。よく見るとどんな表情の羅漢像も何処か憂
いが滲み、愁思の顔に見えてくる。五百羅漢に囲まれて梅澤
さん自身が愁思にかられたことだろう。嘗て川越市の喜多院
の五百羅漢を巡ったことを思い出した。五百羅漢の中には必
ず自分に似た顔があると聞き探して歩いた。

鱗雲どんどん増えてゐて静か

由良野斗喜美

鱗雲は鱗雲、鯖雲とも言われ上空の高いところに発生する
巻積雲の一種である。掲句は秋天に拡がっていく鱗雲の様子
が動画を見るように描かれている。動画は静かに止まった。
澄み切った青空一面拡がる鱗雲の白い耀きが目映い。(静か)
の止めは巧みだ。

重ね着をしていち日を若くをる

菅

雅子

重ね着や厚着は防寒対策の一つ、厚い下着の上にセーター
やカーディガンなどを重ねて着て寒さを凌ぐ。何枚も重ねて
着ると着ぶくれて動作も鈍くなり、どちらかと言えば年寄り
くさくなるものだが、(若くをる)と言う菅さんはお洒落な
方に違いない。今や重ね着はレイヤードルックなどと言われ
お洒落感覚で楽しまれている。素敵に重ね着をして明るい気
分で冬を楽しむものだ。

敬老の日のA席の晴れがまし

見上

恵

子供たちから贈られてきたチケットを手に着飾っていいそい

そと出かける。演劇か歌舞伎か、またはコンサートのチケッ
トかもしれない。座席はA席、いつものB席やC席と違って
舞台全体が見渡せる良い席だ。(晴れがまし)という言葉は
子供たちへの心温まる謝辞だと思う。

その他の印象句

かりがねや末社の隅の捨て梯子
緊急入院満月に見送られ
どの家かパン焼く匂ひ秋夕焼
夕さればおしろいの香に誘はるる
子等に父吾に夫亡く彼岸花
年寄りのくしやみ唐辛子の赤し
秋風や絶対音感もつ人と
面取りて老のまなざし爽やかや
それなりに齢重ねて秋の薔薇
ロボットの鼻の低くて蚯蚓鳴く
亡き母の味に仕上がる八頭

安達みわ子
武田美紗子
西島 美晴
朱 桂子
阿久津早智子
早出 誠治
宮当 信行
渡部 順子
山下なつ子
伊藤 生子
堀 すみ江